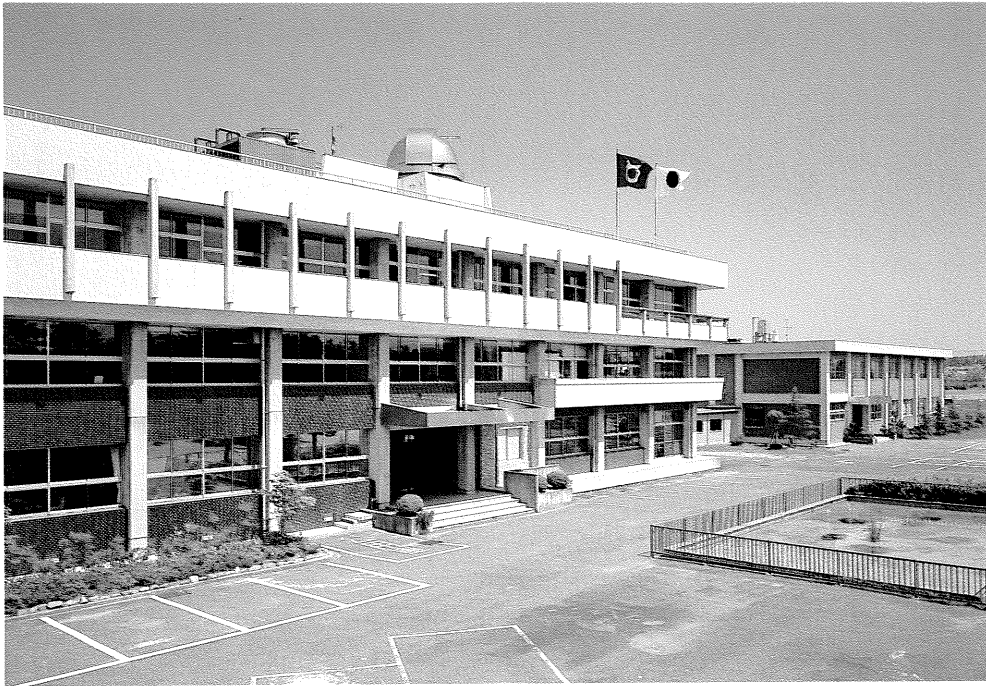


# 創立十年誌

昭和 58 年 3 月

鳥取県教育研修センター

## 鳥取県教育研修センター全景



本館・情報処理教育棟



特殊教育棟

## 目 次

創立十周年を迎えて 所長 石谷義明 .....	1
県教育研修センター創立十周年によせて .....	2
県教育委員会委員長 倉都福之助 .....	2
県教育委員会教育長 坂田 昭三 .....	3
歴代所長（写真） .....	4
回 想 .....	6
沿 革 .....	13
事業の変遷 .....	19
1. 研修講座 .....	20
2. 研究調査 .....	35
3. 教育相談 .....	41
4. 生徒実習 .....	44
5. 図書・資料 .....	46
組 織・機 構 .....	50
1. 機構・分掌 .....	50
2. 定 員 .....	51
3. 予 算 .....	52
4. 職員の異動 .....	53
設置条例及び規則 .....	56
施設・設備の概要 .....	58
あとがき .....	64

（題字 所長 石谷義明）

# 創立十周年を迎えて

鳥取県教育研修センター所長 石谷 義明

教育研修センター創立十周年を迎え、「創立十周年誌」として、当センターの歩みを編集いたしました。

戦後まもない昭和25年、鳥取県教育研究所が設置されましたが、教育内容の広がりや深まりにつれて、教職員に専門職としての研修の重要性が一段と高まり、改めて昭和48年4月、鳥取県教育研修センターとして発足いたしました。以後、今日までの十年間、この小冊子にみられる如く、施設・設備は年どしに整備・充実され、また、研修内容も年をおって深化・充実し、教育研修センターとしての役割を十分果たしてまいりました。これ実に、歴代の所長を中心とする先輩各位のご努力、日々教育にたずさわっておられる先生方のご支援、ならびに、行政当局の手厚い加護のたまものと深く感謝いたしている次第でございます。

教師には、二つの大きな任務がございます。その一つは直接指導であり、他の一つは間接指導、即ち研修でございます。二つの任務と申しましたが、指導と研修は本来教師にとっては表裏一体でございます。ところが、多忙という言葉のかげに、研修を忘れることも時にいなめません。このことを考えるとき、研修センターのもつ意義・果たす役割は極めて大であります。いたずらに時流に走ることなく、時々の問題には適切なる対応を模索しながらも、常に教育の本質、教科の本質を尋ね求めることが大切であると考えます。

始めがあって、終わりのないもの。これは教育であり、研修であります。いうなれば、教育と研修は常にアルファでございます。私たちは、教育研修センター創立の初志を瞬時たりとも忘れることなく、微力ながら不断の努力を続けるべく意を新たにしている次第でございます。

皆様におかれましても、このセンターに対して変わらぬご指導・ご助言と、そしてご協力をたまわりますようお願い申し上げます、発刊のご挨拶といたします。

昭和58年3月31日



県教育研修センター創立十周年によせて

## 開設十周年を迎えて

鳥取県教育委員会委員長 倉都 福之助

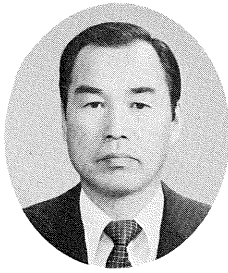
鳥取県教育研修センターが発足以来10年、本県教育のために大きく貢献されたことに対し、心から敬意を表するものであります。

前身であった鳥取県教育研究所は、教育に関する研究調査と教員研修を主任務として、大きな業績をのこしたのでありますが、急激な社会の進展に伴って学校教育のあり方に対する社会の関心と要望が高まり、これに応じて本県教育界の大きな期待のもとに鳥取県教育研修センターとして新発足したのであります。

爾来、教職員の研修・教育に関する研究調査・教育相談事業、さらには、情報処理教育における生徒の実習などに取り組み、本県教育の充実・向上に大きな成果をあげてきましたことは、ご同慶にたえません。

また57年度には中国地方で初めてという施設・設備を持った特殊教育センターが新設され、教育研修センターは、まさに本県教育の中核的施設となりました。

これを契機として、一層の飛躍と発展を切望します。



## 開設十周年を迎えて

鳥取県教育委員会教育長 坂田 昭三

鳥取県教育研修センターが昭和48年に設立されて、今年度で10周年を迎えます。その間、本県教育の向上に大きく寄与する教育機関として、その機能を十分に発揮してきたものと考えております。

今日、社会の急激な変化とともに、教育への関心は一層高まり、教育の充実をねがう各界各層の要望は大きいものがあります。特に、学校教育に対しては、教育内容の質的改善が求められています。

教育研修センターは、学校教育の総合センターとしての機能を有しつつ、県内教職員の研修の基地としての役割を果たすものであります。

昭和50年度には情報処理教育棟を増設し、さらに昭和57年度には特殊教育棟を設置し、教職員の各種の研修事業を充実するとともに、本県教育の課題について研究調査を行い、教育問題の解決に取り組んでまいりました。また、教職員、児童、生徒、保護者に対する教育相談、情報処理の生徒実習、教育図書や研究資料の整備などを行い、教育実践の場に大きく寄与しております。

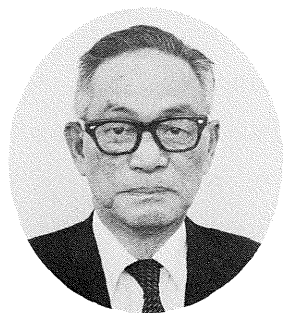
本県教育をさらに発展させるためには、未来への教育を先導する教育研修センターの事業が、より充実されなければなりません。教職員の研修は、単に新しい知識や技能を身につけるだけでなく、教師自ら思索し、的確な判断のもとに、主体的に行動できる力を養うことがねらいです。人間性豊かな児童・生徒を育成するために、教師一人ひとりが教育専門職としての高い識見と創造性、限らない愛情をもつことが必要であります。

創設10周年を一つの節目として、過去を振り返り、将来への展望をもつことは、まことに意義深いものがあります。これを機に、今後ますます設立の趣旨に沿い、県民と教育現場の多様な要求に対し、可能な限りの情報・技術等を提供し、新たな飛躍発展を期することを、念願しているものであります。

最後に、今日の県教育研修センターを支えてこられた歴代の所長をはじめ、所員関係者各位のご労苦、ご尽力に対し、心から敬意を表する次第であります。

# 歴代所長

(鳥取県教育研修センター)



中尾 太郎氏 (初代)  
48.4~51.3



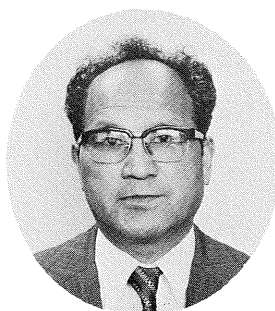
岡本 一郎氏 (2代)  
51.4~54.3



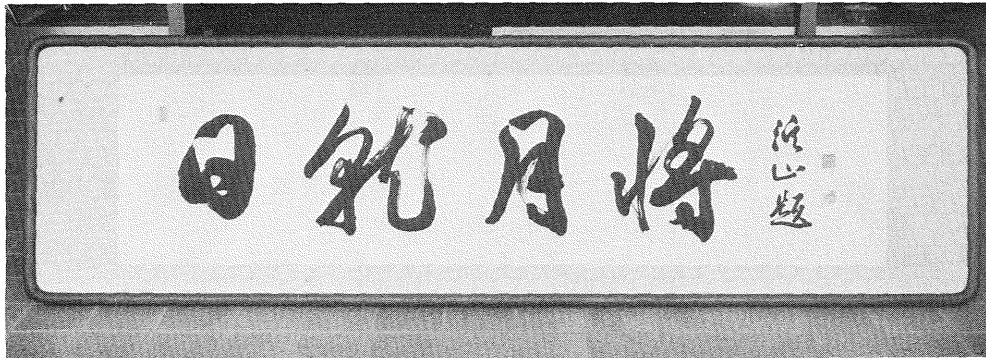
田村 一三氏 (3代)  
54.4~55.9



谷川 峰男氏 (4代)  
55.10~57.3



石谷 義明氏 (5代)  
57.4~



「日就月将」藏光溪山書  
(本館の玄関に掲示)



昭和57年度所員・長期研修員 (58.3.30撮)



## 回 想

# 思 い 出

初代 所長 中 尾 太 郎

昭和48年度に開設した教育研修センターに3か年在職しましたが、開設にご協力いただいた職員の皆様には感謝するとともに、県下の教職員の研究、研修のメッカとし、生徒の楽しい勉学の場として、ますます発展されることを心から願っています。

ご承知の通り、昭和35年から、全国学力調査、教育課程改訂など教育内容の充実、精選が図られました。その他、産業教育、特殊教育の充実、生徒指導の強化とともに、指導力の向上が叫ばれ、教職員研修の重要性が強調されました。

40年代の初期には、各教科、新任、管理職、主任・主事と、各種の講習会や講座が企画、実施されました。

しかし、研修については、自主研修か命令研修か、教育行政は教育基本法第16条により教育条件の整備をすればよい、研修は教職員の自主性にまかせればよい。いや、研修については教特法第3章第19条、第20条に明記してある。任命権者は、研修施設、研修計画を樹立し、実施に努めなければならない。命令研修のあるのは当然である。……等々、相当期間、論議されたものであります。

本県の教育研修センターは、県下の教職員数が少ないなどの関係から、施設の規模は小さく、研修主事の人数が少なく、他県に比較して貧弱にみえましたが、講師の謝金、旅費、受講者の出張旅費は、県当局（当時は石破知事、平林総務部長）の格別のご配慮をいただき、全国から熱意のある講師を招へいし、充実した研修講座ができました。また、石破知事も、年に一度は講義を引き受けられ、管理職の道を話してくださいました。受講者にも、あまり経済的負担をかけることなく、喜んで参加していただいたと思っています。

情報処理教育、特殊教育の施設も完成し、名実ともに総合教育センターになりました。今後、教育課題の解決、指導力を高める研修、教育情報提供の場として、その機能を充実され、県民の期待に応えられることを願っています。

# 想 出 雑 感

加 島 俊 朗

(元庶務課長)

創立10周年をお祝い申し上げます。私は教育研修センターが第一歩を踏み出して以来、5年余りの間、みなさんと共に今日あることを夢見て歩んできました。昭和53年10月、本庁へ勤務が変わりましたが、今から考えて見ると、意気に燃えて、私の最後までこの研修センターの人間でありたかったことも事実です。

ところで、今年は、正月が過ぎても暖かくて、なかなか雪を見なかったのですが、やっと11日朝になって30cm積りました。こんなに降ったのはこの冬初めてのことで、町中総出で道あけをしている姿をみると、いつも思い出すことは、教育研修センターでの雪かきです。いつの年でしたか大雪に見舞われ、自宅から研修センターまで歩いて出勤したこともありました。みんなが、大雪の中をトボトボと玄関にたどりつくと、一息入れる間もなく手に手にスコップを持って、車が通る位の道幅の道あけが始まる。湖山・賀露線県道までと言えば本当に長い距離を「長いなあ」「長いなあ」とつぶやきながらやっと終わる。ところがもう一息という掛け声に、みんなはものも言わずに車回しや、広場を作って本当の終わりがやって来た。こうして全エネルギーを消耗したものでした。

このようにして、冬の雪かきは研修センターの行事の一つだったことも思い出の一つに残ります。

普通雪は空から降ってくるのに、湖山の雪は横向きに流れるように降ってくる。風が強くと、しかも吹雪になると大きな松の木の幹にへばりつき、長い年月の間に枝が風の方向を示すが如く、格好の木になっています。

現在の教育研修センターは、右に情報処理教育センターを、左に特殊教育センターを配し、大きく生まれ変わり、本当の意味の教育の殿堂として威風堂々の感を与えてくれるようになりました。

今年、湖東中学校の運動会にさそわれて、しばらく運動会に見入っていたが、視点を空に向けたとたん、研修センターが見たくなり、松林をぬけて広々とした建物に出合った。丁度日曜日で誰一人いない研修センターを遠くから眺め、カメラに収めて帰った。写真の出来不出来より、あの懐しい気持ちは、いつまでも心に焼きついている。気障な<sup>きざ</sup>言い方ですが、愛するとはまさにこのことを言うのかもしれない。最後に、この教育研修センターが、時代の変化に対応し、先生方のためまな研究の場として、益々の発展と職員のみなさんのご活躍を心からお祈りします。

# 創業当時のこと

池 本 晃 逸

(元研修第一課長)

57年元旦に、「センターの10年をふり返るような会でもあればと思っております。…後略」。

まことに心温かい年賀状を小谷腆夫先生からいただいた。57年7月5日には特殊教育センターの竣工式に参列して、県教育研修センターの充実のすばらしさに目を見はった。そして創業当時の苦労にもまして4・6・8年と、現在に至る間の関係各位のご労苦を偲び、「創業は易く、守成は難し」との感懐を持った。当時の研修第一課では、しだいに次のような意識がもりあがっていった、ように記録している。

- ① 学ぶ者としての自覚をもって研鑽に努め、相手に通じあうものを作っていこう。
- ② 協力して実践し、その過程を通じて個性や長所を生かしていこう。
- ③ 研修第一課のことだけでなく、センター全体のことに関心をもち行動しよう。

さらに、「100日間の研修講座を開催するためには、150日間の事前準備が必要だ」など、こんな気迫が満ちていた。

昭和43年(実質経済成長率13.8)をピークに高度成長を遂げた日本経済も、しだいに下降傾向をたどり、昭和48年には石油危機、昭和49年には東京で年平均消費者物価が22.7%も上昇し、「狂乱物価」と呼ばれ、世界的不況の波がおしよせ始めた頃のことであるから、所員の定数確保についても極めて困難であったことが想像できる。

当時、発展的に閉所となった県教育研究所(県立図書館講堂)から、多数の図書・文献を研修センター2階の図書室に搬入する仕事を手はじめとして、48年6月18日の竣工・開所式を迎えるまでの間に、研修環境の整備・充実とあいまって、教育効果をたかめ魅力のある講座を持つために、連日、意見交換と協議をかさねた。

昭和48年度の研修センターにおける研修講座の計画(小・中・高校と、幼稚園・保育所関係)を概括すると、次のようであった。( )内の数字は研修第一課の計画数である。日数240日(136)、参加予定人員1,816人(1,066)、講座93(48)。〈注〉同じ内容の講座を2回実施したものもある。

OHPの利用と教材製作、たて笛、電子オルガン実技、社会科野外観察と調査、英語教育講座(LI操作と実習)、木彫・彫塑実習、毛筆書写等…実習・実技のともなう講座に関心がたかまっていった。放課後、自発的に来所して教材製作に励む教師がみられだした。

49年度の全国レベルでの共同研究テーマとして、「教科における学習能力の発達と授業に関する研究」、「子どもの生活構造についての研究」、「学校経営の最適化の研究」…等があった。

# 思い出することなど

音 田 諒 治

(元研修第一課長)

〈開設のころ〉 新装のセンターは、松の林の緑の上に落ち着いた上品な影を浮かべていた。それは多くの期待が凝集された建物であった。玄関に立つと、何とも誇らしい気分になった。

昭和48年4月1日、新しい陣容を整えての出発であった。総勢25名、新しい仕事への期待で興奮していた。最初は、県立図書館の講堂から、教育研究所所蔵の図書資料と備品類の運搬であった。数百に及ぶダンボール箱にぎっしりつまった本の荷は重く、ずっしりと体にこたえ、不平をもらす者もいた。新しい備品も加え、各課がそれぞれに落ち着きを得るまでには、1か月近くを費した。

整理が終わって一息つく間もなく、研修講座の計画・編成の作業にとりかかった。白紙に新しい設計図を描くのである。終日、研修講座や研究調査などを構想し、それを具体化し、予算をつける事務に追われた。それを課でまとめ、全体で集約・調整したものを最終調整に持ち込むまでには何回も積み直しが必要で、連日が数字の処理であった。一定条件の中で新しく作り出す困難さを実感した。そんな毎日、センターの松林のはずれに植え残るピラカンサの紅い実が、疲れた眼を癒してくれた。

〈心に残る講師〉 講師の選定は、研修講座の成否を左右するほどの重要条件であり、その人選には意を用いて慎重であった。多くの講師をお招きした中で、今も心に残り、それを誇らしく思っている方が幾人かある。方言学の権威、藤原与一先生。国語教育学の野地潤家先生、長谷川孝士先生、大村はま先生。教育方法学の吉本均先生。いずれも当代一流の方々であり、多少の知己を得ていたため、好意ある協力をいただくことができた。53年夏、教育学者、鱈坂二夫先生を中部総合事務所での教職教養講座にお招きしたが、日帰りの講義をご快諾くださった。「二男でつぎおと読みます。小原国芳は叔父です。」と、言われた温顔が今も忘れられない。

〈全教連共同研究の運営〉 昭和50・51の2か年、「情報処理能力の育成」をめざす共同研究の運営に鳥取が当たったが、運営責任者として全国規模の研究を計画・運営し、更にその運営協議会を主催して、一切の責を担うことは初めてであり、大変な事業でもあった。一旦受けた以上、後へは引けなかった。国研へ足を運び、当時の日俣周二部長、大野連太郎室長の助言のもと協議を重ね、研究計画を設計した。一・二課を中心に研究体制を整え、学校現場から教科ごと3名の協力員を委嘱して研究に取り組んだ。しかし、主題内容の共通理解や、授業による実証もはかどらず、苦労が多かった。

51年秋、成果を発表交換する研究協議会を開催。センター挙げての準備と応対は大変であった。他県の出席は28所で、テーマのむずかしさが、研究への参加を少なくしたようである。翌3年次、山梨に引き継がれ、成果は、「情報処理能力育成の研究」として全教連から出版されている。

(倉吉市立河北小学校校長)